

命の重み

東日本大震災では地震や津波によって多くの方がお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。いまだ行方不明の方々も大勢いらっしゃいます、沿岸の町の姿には言葉がみつかりません。

平成7年(1995)、兵庫県に住んでいた私は阪神淡路大震災を経験しました。大きな縦揺れで目が覚めると、空が白く光り、その後、強い横揺れが続きました。部屋の中は無茶苦茶になりましたが、家屋は一部損壊にとどまりました。しかし阪急伊丹駅が倒壊し、慣れ親しんだ三宮の街も変わり果ててしまいました。しばらく呆然としていたことを思い出します。

このたび東北・関東地方を襲った地震・津波は1000年に一度という未曾有の大災害と言われています。沿岸の地域にお住まいの方は、地震が発生すると高い建物や高台へ避難するように備えをされていたことでしょうか。しかし、5階建ての建物の4階の高さに達するほどの巨大な津波が押し寄せ、場所によっては高台まで津波が襲ってきたということです。人間は天災にはかなわない。天災の脅威を実感させられることとなりました。

大震災の3週間ほど前に神戸で防災イベントがありました。私の講演の前に静岡県のNPO団体による「稲むらの火」という人形劇がありました。「稲むらの火」の概要は次のとおりです。

村の高台に住む庄屋の五兵衛が、地震のあと海の水が沖合へ退いていくのを見つけました。彼は

過去の経験から津波がやってくることにいち早く気がつき、村の人々に津波の襲来を知らせるために稲の束(稲むら)に火をつけました。驚いた村の人々が高台に集まってきて、その直後に津波が襲ってきました。刈り取ったばかりの大切な稲を犠牲にして、村の人たちの命を救ったという物語です。安政元年(1854)に発生した安政南海地震の津波をモデルに、地震による津波に対して早急な避難の必要性を啓発するために書かれたものです。

その人形劇で「村が消えても、命があれば…なんでもできる」というセリフがありました。今回の大震災でも「私は家も民宿も船も流されましたが、命があるだけで…」、「生きてただけで私は幸せなんです」と話されている被災者の方々がいらっしゃいました。命の重み…私にとって人生観が変わってしまうような出来事が起こってしまいました。

多くの方が自分にできることはないか考えたはずです。私も例外ではありません。しかし、ボランティアの受け入れ態勢が整っていないなか、医療などの専門知識のない私が行っても迷惑をかけるだけなので、ニュース7の気象情報のなかで被害地域の天気を伝えることしかできませんでした。まだ朝晩は氷点下まで冷え込み、雪の降る3月で、電気やガスなどのライフラインが断たれている寒い避難所生活は、どれだけ身体に負担となること

気象予報士 なから い 半井 さ え 小 絵



だろう。直接、何もお手伝いすることができない自分との葛藤でした。

私が専門としている「気象」は「地象」である地震と現象が違いますが、防災に関わっている点では同じです。日本は気象の災害も多い国です。毎年、梅雨のころから秋の大型台風の季節にかけて大雨による災害が発生し、冬には大雪の被害にも見舞われます。雨に関する災害だけでも平成10年以降、「平成10年8月末豪雨」、「平成16年7月新潟・福島豪雨」、「平成16年7月福井豪雨」、「平成18年7月豪雨」、「平成20年8月末豪雨」、「平成21年7月中国・九州北部豪雨」、「平成22年10月奄美豪雨」等近年は毎年のように被害が出ています。

台風のような水平距離の広い現象は、気象衛星ひまわりで台風の発生から接近までの実況を確認することができます。防災用品を少し揃えるなどの備えはできますが、集中豪雨は予測が難しいのが現状です。日本付近に前線が停滞していたり、下層に雨雲が発達する原因である暖かく湿った空気が入ってきたり、上空に寒気が流れ込んできたりと、大気の状態が不安定な場であるということはわかります。しかし、その大気不安定状態のなかで、局地的な集中豪雨をもたらすのです。ひとつひとつの小さい雨雲が発達し、その雨雲が数時間、同じような場所にかかり続けると、あっという間に洪水を起こすような豪雨となってしまうことがあるのです。また、大量の雨が土壌にし

みこんで地盤が緩み、土砂災害が発生することもあります。

災害は突然襲ってくるものですが、地震と気象では、たとえ集中豪雨であっても気象のほうが時間の猶予はあるはずで。雨の降り方が、普段と少し様子が違うのでは？と思ったら「早めの避難」が一番です。川のそばや急な斜面の近くにお住まいの方は、1秒でも早く安全な場所に避難することが必要です。

心理学で「正常化の偏見」という言葉があります。人は「都合の悪いことは自分にふりかからないだろうと思ってしまいがち」なのです。つまり、自分だけは災害にはあわないと思いがちだということですが、その考えは捨ててください。

このあと梅雨、そして夏から秋と大雨の被害が増える時期にさしかかります。地震の被災地の天気が心配です。長野県や新潟県付近も、強い地震があった影響で土砂災害の危険性が高くなっている地域があります。また、九州南部の新燃岳ではいまだ火山活動が活発です。雨が降れば泥流や土石流の恐れもあります。

自然災害の多い日本において、災害から自分の命を自分で守ることを基本に、いつも最悪の状態を考えて、いち早く公的な情報などを得て行動することが大切だと思います。